

審査論文の要旨

本稿は、第二次世界大戦以降、批判されるようになったヘレニズム世界の一体性、勢力均衡論を再評価しようとするものである。近年の軍事王権研究の成果、とくにバルバロイ（＝蛮族集団）との戦功が王権確立に重要であったとする見解に着目し、ポリュビオスの『歴史』における「バルバロイ」の語用から当時の国際関係・世界観を分析する。

第1部：ヘレニズム諸王国の戦争と国際関係の基本的性格

第1章では、ヘレニズム王国間の関係を、セレウコス朝とプトレマイオス朝エジプト間の一連の戦争から検討し、いずれも王の代替わりに伴う領土再確認を目的としたものと指摘する。

第2章は、セレウコス朝の有力王族アカイオスの反乱を考察し、王位継承の際に血統による継承権のみならず、バルバロイへの戦果の有無が王位を決定づけたと論ずる。

第3章は、バルバロイの語用について、近年の研究が理性の有無を重視するのに対し、ポリュビオスによるアンティオコス3世の東方遠征の記述から、支配者がアレクサンドロスの後継者か否かが判断基準となっていたことと各国の統治理念の共通性を示す。

第2部：ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像

第4章は、アレクサンドロスについて、先行研究がローマ時代の諸『大王伝』を基に史実を考察するのに対し、ここでは、ポリュビオスに拠ってヘレニズム時代の大王のイメージを検討する。

ポリュビオスによるアレクサンドロスのテーバイ破壊事件に関する記述をもとに、彼がアレクサンドロスに敬神と幕友を特徴とする王の理想像として描いたことを指摘し、他方、後継者諸王朝は、いずれも彼を統治の手本としたことをもとにヘレニズム王権の統治理念の共通性を確認する。

第3部：ローマの進出とヘレニズム世界への衝撃

第5章は、ローマとアンティオコス朝ピリッポス5世、セレウコス朝アンティオコス3世との戦争を検討し、いずれも敗戦後に王が権威失墜していること、その原因がバルバロイと見なされたローマに敗北したことによることとして、ヘレニズム王朝の統治原理が存続していたことを示す。

第6章は、ポリュビオスのローマをバルバロイとする記述について、彼自身のローマへの敵意の表現とする従来の見解に対し、ローマの将軍フラミニヌスの演説のレトリックに着目して、ポリュビオスはローマにも理性を認めていると論ずる。

終章は、ポリュビオスのバルバロイの用語について、東方ではアレクサンドロスに由来する統治者・地理的な要素を重視したのに対し、ローマには理性を認めるというダブル・スタンダードを用いていること、それはヘレニズム世界にバルバロイ・ローマを受容する方策であったとまとめている。